



# SMILE

笑顔あふれる東山中

## ★教育目標★

- |                 |           |
|-----------------|-----------|
| 1 心身を鍛え 実践する生徒  | = つよく =   |
|                 | Be Strong |
| 2 自ら進んで 学びとる生徒  | = かしこく =  |
|                 | Be Smart  |
| 3 豊かな心もち 協力する生徒 | = あたたく =  |
|                 | Be Kind   |

目黒区立東山中学校

〒153-0043 東京都目黒区東山1-24-31 TEL 03(3711)8794

校長 西田 友幸

FAX 03(3711)8896 <http://www.meguro.ed.jp/meghyjhs/>

## 徳を積む

校長 西田 友幸

夏ドラマで「ちはやふるーめぐりー」というテレビドラマを見ていた人はいらっしゃいますか。高校生の競技カルタ部の青春ドラマでした。東山中でも国語の授業の一環で百人一首を実施していますよね。ドラマの中で、部活が終わった後、練習で使用した畳を顧問の大江先生が一人で拭いていたり、生徒が脱いだ靴を揃えたりしているシーンがありました。主人公のめぐりが理由を聞くと大江先生は「徳を積んでいるのです」と答えていました。



「徳を積む」という言葉は、簡単に言うと「良い行いをして心を磨き、自分も周りも幸せにすること」を意味します。昔から日本では、良い行いを積み重ねることで、自分の人生がより良い方向に進むと考えられてきました。大江先生は梅園高校のカルタ部の生徒の成長を願って徳を積んでいたのです。

「徳を積む」例は現実でもよくあります。メジャーリーグで活躍する大谷翔平選手は、グラウンドにゴミが落ちてると、さりげなく拾ってポケットにしまうなどの行いをよく目にしますね。大谷選手の行動は、まさに「徳を積む」ことの一例であり、彼の人間性が多くの人々に良い影響を与えているのです。

先日東山中の野球部の試合を参観したときに、バッテリーボックスにいる選手が相手チームのキャッチャーのマスクを拾って手渡すという気遣いを試合中に行っていました。これも「徳を積む」一例ですね。【えらいぞ！野球部】

さらに大谷選手などのトップアスリートたちは、競技の場だけでなく、社会貢献活動を通じて「徳を積む」ことを実践しています。例えば、大谷選手は日本の震災被害を受けた地域に寄付をしたり、すべての小学校にグローブを配付したりして、子どもたちに夢を与える活動をしています。こうした行動は、スポーツを通じて社会に良い影響を与えるものであり、まさに「徳を積む」ことの実践です。

「徳を積む」という行動は、必ずしも大きなことをしなければならないわけではありません。大谷選手のようなトップアスリートの行動は確かに目立つものですが、私たちの日常生活の中でも「徳を積む」ことはできます。例えば、友達が困っているときに手を差し伸べたり、部活動で率先して道具を片付けたりすることも立派な「徳を積む」行動です。こうした小さな行動を積み重ねることで、周りの人々を幸せにし、自分自身の心を豊かにすることができます。

10月は地域のイベントがたくさんあります。それぞれのイベントにボランティアとして参加することも「徳を積む」ことにつながります。その行動が周りの人々を幸せにし、最終的には自分自身の未来をより豊かにしてくれるのです。ぜひ、積極的にチャレンジしてください。



## ～目黒区連合体育大会 壮行会～

10月2日（木）の目黒区連合体育大会にむけて、壮行会がありました。選手の皆さんの活躍が楽しみです。



応援団による応援



選手入場の様子

## ～expert time 発表～

expert time(ET)の発表が始まりました。今年度は自己選択学習の時間を「expert time」と名付け、生徒たちが日々の生活の中で感じる課題や興味のあることから自ら「問い」を設定し仮説を立てて検証するという学習スタイルに挑戦しました。

自分で考え、明確な答えのない問いに取り組むことは決して簡単ではありません。苦戦している生徒もいましたが、だからこそ生まれた魅力的で独創的な問いと発表が数多くありました。初めての取り組みということもあり、思い描いていた結果に到達できなかった人もいるかもしれませんが、それは決して失敗ではありません。「一つの可能性を検証し終えた」という貴重な学習成果です。

ETでの学習は「スパイラル型学習」と呼ばれる学習スタイルです。これは分かったことを段階的に積み上げていく継続的な学習方法です。

仮説通りの結果が出なかった人 → 新たな仮説を立てる機会

仮説が立証された人 → その成果を踏まえた次の「問い」を設定する段階

どちらも次のステップへの重要な基盤となります。このように学習を螺旋状に発展させていくことで、より深い理解と探究心を育てていくことができます。

